

山形の発掘調査最前線

—山形城三の丸跡—



期日：2010. 6. 14(月)～6. 30(水)
会場：村山総合支庁本庁舎玄関口

主催：(財)山形県埋蔵文化財センター

山形城

最上氏始祖の^{しばかねより}斯波兼頼が羽州探題として、南北朝時代に役所を置いたところが、のちの山形城本丸付近といわれています。しかし城下町の基礎ができたのは、戦国時代末の最上氏10代と伝えられる^{よしもり}義守の頃で、近世的な完成をみるのは江戸時代初頭の11代^{よしあき}義光の時代です。義光は、山形城を自らの本拠地と定め、若い時から寺院や神社を創建したり、城下の拠点となる場所に移転させたりしました。また、近江商人をはじめ外からの商人や職人を多く招致し、城下の商工業を盛んにしました。

100万石の城下町

関ヶ原合戦の後、出羽合戦(長谷堂合戦)における^{もがみよし}最上義光の功績が認められ、徳川家康より庄内の^{あき}田川・^{くしびき}櫛引・^{あき}飽海^{くみ}の三郡と秋田の^{ゆり}由利郡を加増され、一躍57万石の大名になりました。石高では全国第5位、表高は57万石でしたが、実収高は100万石を超えていたことが、当時の記録からもわかり、山形城下は、正に「最上100万石城下」と称され、^{おうしゅう}奥州随一の人と物資の交流が盛んな城下町となっていました。現在、二ノ丸全体が^{かしょう}霞城公園となっていますが、昭和61年に「国指定史跡」に指定されています。

城南一丁目遺跡

西口都心ビル(現在霞城セントラルビル)建設用地に縄文時代から現代にわたる多様な出土品が見つかったため、平成10年に、山形県土木部から委託を受け、当センターが調査を実施しました。

山形城三の丸のこの地は、当時武家屋敷があり、この頃の遺構として数多くの井戸跡が見つかりました。

出土品は奈良・平安時代の^{はじき}土師器や^{すえき}須恵器、中世・近世のかわらけ、碗や皿、すり鉢などの陶磁器が多数を占めます。しかし川跡の層からは縄文土器も確認されており、縄文時代から現代まで、人々の生活の場となった複合遺跡であると考えられます。



かわらけ(中近世の素焼きの器)出土状況

山形城三の丸跡

第1～3次調査

平成14年～16年にかけて県道東原村木沢線の道路拡張のため、山形県土木部から委託を受け、センターが調査しました。

調査区からは羽口・^{とし}埴^{てっさい}塙、^{かじ}砥石、鉄滓など鍛冶を主とした工場の存在をうかがわせる出土品が見つかりました。また金箔のついた瓦も出土しています。



発掘調査の様子



出土品

第5・7次調査

第1～3次調査の延長部分にあたる春日町の調査は、平成20年～21年に行いました。この調査では、三の丸の西側の堀跡を確認することができました。堀跡からは近世の陶磁器や木製品が見つかりました。主に上の層は明治時代以降のもの、下の層からは江戸時代後半のものと思われます。



調査区の様子



碗の出土状況



金箔のついた瓦



堀跡の断面

当時の堀

第4・6次調査

平成20年～21年に一般国道112号霞城改良事業に伴い国土交通省から委託を受け行われた緊急発掘調査です。この調査では、近世の堀跡の存在とその規模を確認し、城下絵図に描かれた堀と遺構としての堀跡の位置を特定することができました。



調査区の様子



おはじき

サイコロ

写真右 泥面子
(おはじきの一種)



碁石



「最上家在城諸家中町割圖」(山形県立博物館蔵)